東海大學日本語文學系紀要
多元文化交流 vol.2 2010年6月

〈特集②:「移動の時代」と街・人・街づくり〉

# 第一広場の変遷

白 春燕

## 1 はじめに

台中駅から第一広場までは中正路にまっすぐ沿って歩くと5分間かかる。バスターミナルが集中している建国路(駅の横の道)では、自宅や学校の寮に戻るためにバスや電車に乗りに来る大勢の人々が溢れている風景をいつも日曜日に見かける。中正路に引き続き沿って歩いて緑川東街を渡ると、台中市内バスである仁友客運のバスセンターが見える。ここは建国路より広い空間であり、東南アジア人の顔をしている人々が所々にのんびりと座っている風景に変わって来ているが、中正路には駅やバスターミナルへ行くために急いで歩いている台湾人はまだ見ることができる。但し、最後に緑川西街を渡って第一広場に来たら、入り口には東南アジア人が溢れている様子が目に入り、台湾人の姿は見えなくなる。第一広場と建国路のバスターミナルの賑やかさは同じであるが、雰囲気が全然違う。第一広場が現在のように東南アジア人が集まる名所になっているのは、開業してからそうなっていたのではなく、時間の流れの中でだんだん変化してきたのである。本論では時間の流れに沿って第一広場の変遷の経緯及び現状を見てみたい。

## 2 第一市場

現在、第一広場は総合商業ビルと認識されているが、その前身は公設消費市場としての第一消費市場(略称「第一市場」)であった。

### 2.1 台中第一消費市場の前身

日本統治時代以前、市場というものは交通が便利な場所で個人の自由経営の形で日用品・雑貨を販売していたのであるが、市場用の建物や管理方法などは全然無かった。ねずみによる伝染病が流行った1896年には、日本人が衛生上の理由で台北の艋舺、大稲埕に公設消費市場建設を始めた。(莊治宗、電火球仔月刊No.52)1901年に総督府は台中第一消費市場の



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC 國家圖書館

前身である自由経営市場に対して、設備などについて厳重な監督を始めたが、建物がまだ建設されなかった。1907年には、市場経営者に補助金を交付し、公共衛生費管理者の職権は台中庁長に移された。(氏平要、1934:511)

## 2.2 台中第一消費市場の設立

1908年10月に緑川河畔の1,868坪の敷地に、560坪[1]の建物を建築し消費市場として開設した。1918年に中央の本館324坪を増築した。1927年に敷地の回りにレンガ囲いが建てられた。1929と1930年[2]に事務所及び桜橋通り(今の中正路)に面する簡易売店が新築された。1929年は売店147軒、1日の入場者数3,500人で繁盛した。(氏平要、1934:512)また、1937年は1日入場者数が4,500人まで増えた。(台中市役所、1937:97)1921年に公共衛生費管理者の職権を台中市尹に移し、台中市の歳出金で経営を維持した。取締上は請願巡査[3]を、監督上は市場書記等を置き、経営管理は台中市消費市場使用条令に拠った。(氏平要1934:511)

当時、台中市は栄町(第一)、新富町(第二)、桜町(第三)の三箇所に市営消費市場を経営していた。小売市場として魚、肉、野菜、果物など日用必需品が販売された。1917年に建設された第二消費市場は現在も建築が保存されながら市場としての機能も働いている。1917年に「第一消費市場と同様式の建物にし」た(氏平要、1934:513)ので、当時第一消費市場は今の第二消費市場と同じように西洋風のレンガ作りであり、屋根上には小さなタワーが建てられていたことが確認されている。このタワーは眺望、防衛、見張り・助け合いなどの機能を持っていた。第一消費市場は栄町通(今の継光街)、寿町通(今の緑川西街)、千城橋通(今の成功路)、桜橋通り(今の中正路)という四つの道路に囲まれていた。第一消費市場のような四面とも道路に面するという敷地は集客や消防、通気などにはとても有利であるし、「其の位置市商業枢要地に在るが為、四時殷盛を極む」。(氏平要、1934:512)

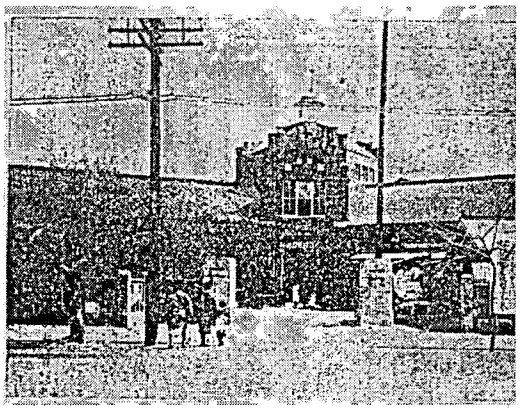
第一消費市場は1907年に『台中消費市場』という名称だったが、1917年に第二消費市場の建設により第一消費市場に改名された。政府が規定した名称は第一消費市場であるが、庶民の間で通用した呼称は栄町市場であった。



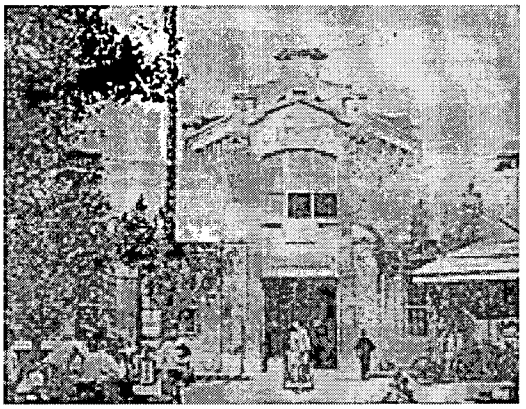




NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.



第一市場(氏平要、1934:513)



第二市場(「台中文献」、2003:96)

## 2.3 戦後の第一市場

第二次世界大戦による物資の欠乏を理由として台湾人の自由売買が禁止されたが、戦後は自由売買が再度行われた。戦後から1970年代にかけて台中駅から北西へ広がっていく約114ヘクタール(114万平方メートル)の地域では、台中駅商業中心が形成され、売店や露台などによって埋め尽くされ、中部四県市の住民の日常需要品を提供していた。(廖家偉、2003:6)第一市場は台湾中部の商業枢要地にあり、きわめて繁栄していた光景が想像できる。

第一市場は戦後の都市使用区分では市場用地と規定され、土地の所有者は財団法人台湾省私立台中仁愛の家[5]であり、台中市政府が賃借して市場経営を行っている。1978年に火事が起こり半焼した。建て直し及び都市更新のために、「都市計画公共施設用地多目標使用方案」に従って多目的使用としての総合商業ビルの建設が台湾省政府に認められた。公開競争入札で落札した衆城建設股份有限会社と契約が結ばれた。総合商業ビルとしての建て直し案が立ち上げられたが、すぐには着工しなかった。1987年にようやく改築に着工、1990年11月28日に完成、1991年2月より本格的な営業が開始されたが、正式な開幕式は1992年に行われた。台中市政府は民間資金での市場用地投資及び建設を奨励するために、1980年に「第一総合市場投資建設奨励計画(第一綜合市場奬勵民間投資興建計畫)」を公布した[6]。第一市場はこの計画に従って立て直した総合商業ビルの第一例であった。

1978年の火事から1987年までの期間は、第一市場は営業停止ではなく、焼却した瓦の屋根をメタル屋根に変えただけで、営業は引き続き行われた。1987年に改築のため、緑川上に建



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

てられた敷地へ引越しされ、臨時市場として営業も続けられた。つまり、1978年の火事以来、建て直し計画は営業主の商売には多少影響を与えたが、販売は続けられたのである。1970年代は、台中が、台中市都会地域の中心地として、商業地としての機能が働いたことを背景に、第一市場は絶えず繁栄を続けた[7]。その後、1991年の第一広場の完成につれて大繁盛モードに突入した[8]。

## 3 第一広場

### 3.1 総合商業ビルの建設

第一広場の敷地面積は、第一市場と変わらず、延べ面積は1,868坪であり、継光街、緑川西街、成功路、中正路という4本の道路に囲まれている。ビルは緑川西街に面し、住所は台中市緑川西街135号である。完成当時、前述の多目的使用に従って地上13階、地下3階の総合商業ビルとして1990年11月28日に完成された。1～3階は小売市場[9]、4～12階はカラオケやスケート場、ビリヤード場、ゲームセンター、映画館、分譲アパート、企業用事務所など、地下1階は飲食店が集まる美食街と洋服店、地下2、3階は避難室・駐車場として使用された。管理者は衆成管理顧問会社であった。現在は1～3階の小売市場は台中市第一公有小売市場として台中市政府が所有しているが、土地所有権は相変わらず台中市私立台中仁愛の家に属している。1～3階以外のフロアの住宅持ち主は住宅所有権を持ちながら土地所有権者の台中仁愛の家に土地使用料を払っている。台中仁愛の家は直接テナント(1～3階)及び住宅持ち主(1～3階以外)から料金を貰うことではなく、台中市政府が代わりに料金徴収事務を行っている。

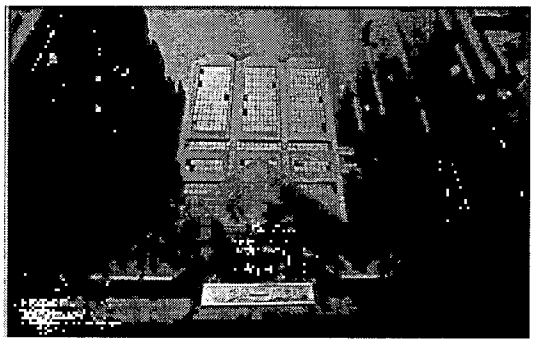
衆城建設株式会社は台中市政府の建設成果を現すために市政府の認可を貰って自費で記念性建築物としてガラスピラミッドを建設した。ガラスピラミッドは強化ガラスと中空ステンレスパイプで建てられたものであり、第一広場ビルが緑川西街に面している開放空間に設置された。ガラスピラミッドの下方は地下1階の売店へ行くための入り口であり、エスカレートが設置された。但し、監察院は、建築法の「記念性建築物」の認定基準に適合していないことを理由として台中市政府に対して改正案を出した。ガラスピラミッドは2000年3月23日に取り壊された[10]。当時の若者は待ち合わせ場所として活用したガラスピラミッドの消失に対して残念な気持ちを表した。第一広場の景気はガラスピラミッドの消失につれて段々悪くなったという土地の人の感想もある[11]。







NATIONAL CENTRAL LIBRARY R.O.C.



出典:1998年代の第一広場(余如季1998:69)

### 3.2 第一公有小売市場

表1 台中市第一市場のブース·店舗数の変化

| 年代 | ブース数 | 店舗数 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 1992年 | 360 内訳:1F(93)、2F(136)、3F(131) | 58 | 418 |
| 2006年8月 | 250 | 58 | 308 |
| 2009年11月 | 179 内訳:1F(88)、2F(0)、 3F(91) | 58 | 237 |

出所:台中市政府経済局(2006年8月)情報や2009年10月17日、11月14日に3階管理委員会主任委員連朝旺氏と経理劉淑芬氏へのインタビュー記録を元に筆者が整理した。

第一公有小売市場は道路に面する店舗及びビルの1～3階に設置した固定ブースを含んでいる。ブース·店舗の数量は、2006年は1992年開業時より27%、2009年は2006年より23%減少した。全体的に見れば、1992年から2009年までに4%も落下し、衰退している。しかしその中で4本の道路に面している58軒の店舗数は減少していない。人気がある商業地域なら景気衰退の影響を受けないで維持できることが分かる。1～3階のブースの方は1992年と比べると、1階は6%減、2階は100%減、3階は40%減となっている。

**1階**

現在、携帯電話関係商品を始め、洋服、靴、装身具、刺青、指美容、かつら、果物、オーダーメイドスーツなど、様々な商品が低価格で販売されている。東南アジア人はもちろん、台湾人の若者も低価格を狙って来ている。台中の中区の商業衰退の中で、1階はアクセスしやすい場所として販売内容は東南アジア人向けに変化しつつあるが、ブース数は6%しか減っていない。そ



NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館

の中、オーダーメイドスーツ店は日本統治時代から有名であった生地/布販売店が発展したものとして考えられる点、、第一広場の少ない例の一つである。

**2階**

最高の時期で100以上はあったブースが、2008年10月から商売が悪くなり、最後に5ブースが残されたまま廃業の運命を迎えた。

**3階**

1階には台湾人と東南アジア人が来ているのに対して、3階には殆ど東南アジア人しか来ていない。主な売店は東南アジア人向けの東南アジア料理、携帯電話、洋服である。台湾人客は廃業となった2階へ上がったら、暗い雰囲気によって気分が悪くなったり、1階しか営業していないと誤解したりする人が多いようである。2階の廃業は3階の台湾人客を少なくしている原因の一つだと言える。





表2　3階における経営実態

| 使用状態 | 消費者 | 売店 | 軒数 | 使用ブース数 |
|---|---|---|---|---|
| 使用している | 東南アジア人向け | (1) 東南アジア料理店 | 12軒 | 26 |
| | | (2) 携帯電話販売店 | 多数 | 25 |
| | | (3) 洋服店 | 3軒 | 4 |
| | | (4) オーディオ機器専門店 | 1軒 | 8 |
| | | (5) 東南アジアスーパー | 1軒 | 16 |
| | 台湾人向け | (6) 切手・コイン専門店 | 8軒 | 11 |
| | | (7) 軍用品専門店 | 1軒 | 2 |
| 使用していない | | 市政府に登録していない | | 31 |
| | | 登録はしているが、営業していない | | 8 |
| | | 合計ブース数 | | 131 |

出所:2009年11月14日に3階管理委員会の経理劉淑芬氏へのインタビュー記録を元に筆者が整理した。

(1) 東南アジア料理店

現在、タイ店8軒、フィリピン店2軒、ベトナム店2軒、合計12軒の東南アジア料理店が経営されている。1軒は1ブースに限らず、通常二つ以上のブースを使っているので、合計26ブースが使用されている。東南アジア料理店の店主は東南アジア人の奥さんと台湾人の旦那さんと



NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

いうカップルであることはその特色である。

第一広場では東南アジア料理店は国に拘らず「泰国店」(タイ料理店)という通称で呼ばれている。2003年に初めて開店した東南アジア料理店はタイ料理店なので、後に開店されたフィリピン店でもベトナム店でも「泰国店」と呼ばれている。タイ移住労働者は2003年に台湾在住人数1位の104,728人(付表1参照)に達したので、タイ人向けの飲食店の開業の多さが理解できる。2003年に開業されたタイ料理店は2年間ほど唯一の東南アジア料理店としてたくさんお金を儲けた。2年後の2005年に3～4軒の規模となり、現在は12軒まで広がっている。最近、店主たちはベトナム人が増えていることを観察した。それは「2008年末のベトナム移住労働者が2007年より14.9%増加した」「ベトナム籍の移住労働者及び外国籍配偶者は1位の161,491人に達している」という事実に合致している(付表1参照)。今後、ベトナム関係の店が増えるかもしれない。

また、インドネシア移住労働者は2005年に44.5%、2006年に42.4%に加したことによって人数が急上昇し、2008年末に台湾在住人数1位の127,764人(付表2参照)に達したが、第一広場ではインドネシア料理店は1軒も開いていない。その代わりに、第一広場周辺のインドネシア街と呼ばれている街にはインドネシア料理店が林立している。2005年以降増えてくるインドネシア人が開業する料理店の店主は第一広場の景気を諦めてその周辺に店を作ったのかもしれない。2009年11月14日に第一広場で出会ったインドネシア女性たちは、インドネシア料理店でなくても、タイ料理の辛さが口に合うので、よく第一広場のタイ料理店で食事していると言っていた。

(2)携帯電話販売店

携帯電話販売店は使用ブース数が東南アジア料理店より少ないが、狭い場所でもうまく運営できる業種なので、軒数は一番多い。営業内容は携帯電話・シムカードの販売、東南アジア各国言語入力支援ソフトのインストールなどである。中古携帯電話がかなり安いという評判があった。

(3)洋服店

男性向け1軒、女性向け2軒。低価格で東南アジア人が好む洋服を販売している。

(4)オーディオ機器専門店

第一広場のオープンとともに開業した店で、最初は台湾人客が多かったが、移住労働者の



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC 國家圖書館

増加につれて、移住労働者客がどんどん増えた。1990年代に移住労働者はラジオやテレビ、CDプレーヤーをプレゼントとして母国の家族へ送っていたので、この店をよく訪ねた時期があった。

(5)東南アジアスーパー

タイ・フィリピン・ベトナム・インドネシアの雑貨や食料品を販売している。倉庫を含めて16ブースを使用している。土日は結構賑やかなのに、赤字の状態となっている。店主は第一広場のこのスーパーの赤字を補填するために、桃園に新しい東南アジアスーパーを開いている。3階管理委員会が低料金でスーパーに使わせている理由は、スーパーを東南アジア人客を第一広場まで足を運んでくる集客手段として活用したいからである。

(6)切手・コイン専門店

オーディオ機器専門店と同じく第一広場のオープンとともに開業したが、来客は終始台湾人であるまま、1991年の3軒から現在の9軒まで成長した異例の店種である。切手・コインという商品を購買する台湾人の客層はごく一部に限られて、独自の商業形態が形成されている。同業者の紹介によって第一広場の低賃金に引きつけられ、どんどんここに移ってきたのである。現在、毎週金曜日に台湾各地の同業者が情報交流のため第一広場に集まっている。

(7)軍用品専門店

切手・コイン専門店やオーディオ機器専門店と同じく1991年に開業した。元々5階で営業を始めたが、1997年頃に5階の廃業につれて3階へ移動した。切手・コイン専門店と同じく来客が終始台湾人である。

### 3.3 第一公有小売市場以外

#### 地下2,3階

駐車場として経営されているが、駐車率は1割以下となっている。

#### 地下1階

1991年に美食街として使われ、活況を呈していたが、1995年の衛爾康レストラン火事[12]の後、市政府は消防安全の検査を強化し、地下1階は消防安全検査が不合格だと認定された。改善工程は千万元以上が必要とされるので、改善しなかった。改善しないまま無理に営業を続けた店はあるが、3階や外へ移ったり廃業したりした店が増えつつ、台湾人客もだんだん来







NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

なくなり、最後2004 年に正式に廃業された。

### 4階

1990年代は人気の映画館であったが、現在、セカンドラン二番館として見逃した映画を安く見ることができる映画館となっている。

### 5階

ブティック店が集まるフロアであった。1997年頃に廃業した。5階の廃業は第一広場の営業に悪い影響を与えた。

### 6階

1990年代ではビリヤード場や漫画屋として使われたが、現在はフィリピン人・ベトナム人・インドネシア人向けのディスコ・クラブとなっている。

### 7階

1990年代からずっと経営してきたゲームセンターのほかに、現在ではMTV(個室で映画を見ることろである)チェーン店も設立された。

### 8階以上

8階以上はA、B、C館に分かれている。1990年代は、A・B館はカラオケ、ボーリング場、スケート場、ホテル、パソコン学習塾、C館は分譲アパート、事務所として使われた。現在は、A・B館はパソコン学習塾がなくなり、娯楽商業施設ばかり残されている。C館は事務所が全部撤退し、分譲アパートの入居率もかなり低い。11階のA・B館は現在、フィリピン人・ベトナム人向けのディスコ・クラブとなっている。

### 13階

A,C館は12階まで、B館は13階まで建設された。当時のB館13階は衆成管理顧問会社の事務所として使われていたが、2004年頃に財務管理の問題によって倒産した後、管理委員会の会議室として使われている。

### 所有権に関わる問題

先述したように、1～3階以外のフロアの店主はテナントではなく住宅所有権を持っている。当時、土地所有権者の台中仁愛の家に土地使用料を払わなければならないことを前提として住宅を購入した。5階と地下1階が廃業した場合でも土地使用料を払い続けなければならない。土地使用料を払いたくない人は、住宅所有権を放棄するなら支払義務が消失する。但し、現



NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

状では住宅所有権を放棄しないまま土地使用料も支払っていない人が多い。料金徴収係の台中市政府は、台中仁愛の家の代わりに未払相手を被告として土地不法占用の訴訟を起こしている。

## 4 第一広場の変化

### 4.1 景気の変化

第一広場は1991年2月より営業を開始、大盛況の光景を示したが、実は、1990年代は第一広場所在地の中区が没落していく時期である。こうのような背景の中で、1995年の衛爾康レストラン火事、1999年の九二一大震災を経て、台湾人客が減少の一途をたどり、経営がだんだん悪化してきた。

国の政策として14項重要建設工程及び6年国家計画を推進するために、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシアの4カ国の移住労働者は1989年より正式に導入された。台中県・市に働いている移住労働者は休憩日とされる日曜日に自分でバスを利用して交通が便利な台中駅付近に来るし、移住労働者をたくさん雇用した工場経営者が会社の車で移住労働者を第一広場付近まで運んできて、楽しい一日を過ごさせる場合もたくさんあった。第一広場管理委員会や関係者は経営を改善する方法を探したところ、移住労働者が第一広場付近に集まっていることに触発され、移住労働者向けの商売を始めたのである。第1軒目の東南アジア料理店が2003年に開店したのに対して、台湾人客向けの地下1階は2004年に全般廃業に入った。東南アジア人向けの商売は第一広場の景気を回復したが、台湾人客を減少させたという問題が現われた。

2008年10月より世界金融危機の影響を受けた台湾では、移住労働者に対して母国へ送還したり、給料を少なくしたりする動きが始まり、第一広場では再度不景気が実感されるようになった。市政府や管理委員会は経営を回復させるために、様々策を講じている。

商業用地への変更;1階～3階は市場用地なので、業種が制限されている。商業用地へ変更すれば第一広場及び付近地域を活性化できるという管理委員会の意見があった。商業用地への変更案は「台中市都市計画変更における市場用地全般検討案(台中市變更都市計畫市場用地專案通盤檢討案)」に収められているが、土地所有者の仁愛の家が反対した。用地を変更する場合、土地所有者は先に多額のフィードバック金(回饋金)を払わなけ







NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

ればならないと規定されているが、用地変更がなされると仁愛の家ではなく、住宅所有者がメリットを受けるようになる。仁愛の家にとってメリットのないまま多額のフィードバック金を払う意志は全然なかったのである。第一広場が仁愛の家と交渉してフィードバック金計画を作成しなければ用地変更の検討は進められない現状である(台中市政府新聞処、2008)。

2階の委託経営:台中市経済発展処市場科は2階のブースを全部回収したので、12月に2階フロア全体を経営委託するために公開競争入札を実施する予定があり、東南アジア、ヨーロッパ料理店や洋服店、若者向けの電子商品店の開店が期待される。(黄任膺、2009年)

補助金1500万元:台中市政府には経済部から補助金1500万元が支給された。第一広場の電気設備や排水設備、植木美化などの改修作業を行う以外に、ビル手前の開放空間(500坪)でコンサート・伝統市場祭りなどの様々なイベントを開催する計画も考案している。2009年11月1日に第一広場で行われた「台湾市場美食店舗(台湾市集名攤)」祭りは第一広場を変身させるための一回目の行事であった。(黄任膺、2009年)

## 4.2 消費的エスノスケープ(consumptive ethnoscape)の変化

BBS(電子掲示板)には第一広場及び移住労働者に関するコメントがある。「微風論壇」では「mms520」さんは「高中時代第一廣場親身體驗(高校時代の第一広場における実際経験)」をテーマにして「約10年前(1998年)の第一広場はとても人気だった。台中人みんなが必ず行く所だ。」[13]と語った。Baby Homeという親子サイトでは母親たちが「1990年代の第一広場」というテーマをめぐって「今の第一広場は移住労働者の天下になったね。でも、1990年代の第一広場はわれわれ高校生の天国だったよ。その中には流行の洋服と美食がいっぱいあった。放課後、いつもクラスメートと一緒にあそこへ買い物に行った。今の光景は全然変わってしまった。移住労働者に占領された。ちょっと怖かった。」「ペンフレンドといつも第一広場のガラスピラミッド[14]の前で待ち合わせた。また、制服屋、写真屋などはたくさんあったよ。」「私も放課後よく第一広場へ通っていた。地下一階においしい料理がたくさんあった。但し、今の第一広場は怖くなっていけない。」「第一広場はわれわれが高校生の時の天国だったよ。懐かしい。」「そうそう。大港都羊肉羹麺という麺店があった。10数年前のことだ。私はそろそろ30代に入るんだ。(1980年生まれ)」といろいろ書き込みが見られる[15]。10年前の第一広場に対する懐かしさ及び現在の第一広場に対する移住労働者の占用による嫌悪感が端的に現われているし、第一広



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC 國家圖書館

場自体に激しい変化がもたらされたことがわかる。このような変化はどう解釈したらいいだろうか。ここでは王志弘(2009)[16]が桃園駅周辺の移住労働者の消費行為及び影響を考察するときに援用する消費的エスノスケープ(consumptive ethnoscape)[17]の概念に沿いながら、同じく移住労働者の消費空間として使われる第一広場における民族景観及び群衆の力を考察したい。

移住労働者は旺盛な消費力によって大歓迎される顧客となったが、永久の定住者とは考えられていないし、土地の人は更に彼らを都市景観の破壊者と見なし、政府に厳しく管理するように要求する(龔尤倩、2002)。現地住民の移住労働者に対するマイナスなイメージに関して、王志弘は桃園駅を例として空間の政治プロセスから分析している。消費的エスノスケープは「不均等な発展によるトランスナショナルの産物及び現われであり、各区域の特殊な都市発展コンテクスト、及び複雑なエスニックや性別、階級の社会関係の中に嵌められている」(同書:311)。桃園駅裏地域に移住労働者の消費空間が形成されたのは桃園県の工業や製造業の発達に関係する。これらの産業の業主に雇用された移住労働者は、平日には工場や雇用主の家にこもっているが、休暇日は都市の商業地へ移動して消費する。桃園市は日本統治時代以来、駅前は商業・行政用途、駅裏は工業用途として使い分けられている。駅裏は政治的な理由から発展できない廃棄区域となり、低家賃及び交通利便などの理由で移住労働者が集まる区域になっている。桃園駅裏は長期的に発展しないまま、駅前の新築のデパートと明らかに対照的である。駅裏の住民の無視されたというどうにもならない気持ちがたまっているうちに、移住労働者の消費的エスノスケープが形成されたとき、その恨みを移住労働者に転移してしまう。汚いや危ない、臭い、騒々しいなど住民が持つ移住労働者に対するマイナスなイメージを、空間の遷移や境界の線引き、領土権の主張などの行為によって具体的に現す。例えば、レジャー運動公園を他の場所へ移す、移住労働者が集まる場所を避けるなど排斥的な遷界行為や境界を定めなおす行為(同書:332)が観察される。また、移住労働者の消費能力に頼るなど境界を越えた接触によって理解や同感が生じる可能性もある(同書: 335, 350)。移住労働者は相対的に自分なりの消費空間を形成し、頻繁にアクセスすることによってエスニック集団の境界を形成する(同書:328)。

台中市は台湾中部の第一都市として台中県や南投県、彰化県、苗栗県に居住する移住労働者が消費・レジャーのために台中駅周辺に来るように引き付けている。桃園駅裏と同じよう







NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

に、消費的エスノスケープが形成されている。特殊な歴史背景のもとで桃園駅裏に移住労働者が集まる区域が形成されたのとは違って、台中の場合は、移住労働者がよく集まる区域は駅前である。その理由の一つは第一広場が経営不振を挽回するために積極的に移住労働者向けの店を経営する策略である。但し、桃園駅裏が長期的に発展せず移住労働者に「占領された」ことは、第一広場が経営不振のため移住労働者に「使われている」こととは幾分似ている。二つの場所とも未発展・衰退の中で移住労働者に「侵入」できる機会を与えて、消費的エスノスケープを形成し始まる。台中住民の移住労働者に対するマイナスなイメージは回避・遷移行為として現われる。例えば、駅やバスターミナルへ向かうために第一広場の中正路に面する店舗の前を通るときに、駆け足で歩く台湾人をよく見かける。また、台湾人向けのグルメ店の撤退や分譲アパートの入居者の減少などの例も挙げられる。移住労働者と台中住民との間の境界線は移住労働者の消費的エスノスケープの形成・拡大、及び台中住民の回避・遷移行為につれて動かしていくのが見られる。台中住民が引いた境界線は移住労働者によって動かされ、マジョリティとマイノリティーとの権力関係は暗黙のうちに逆転している。ある女性は「『外労』[18]を嫌うのは特別な理由がない。ただ嫌いだから。[19]」と述べた。移住労働者への理解をみずから拒絶し、移住労働者への接近も避ける彼女は、自分の回避行為によって自分の存在空間を少なくしてしまうことが分かったら、どんな表情をするだろうか。さらに、第一広場の台湾人店主や管理委員会のメンバーは移住労働者の消費行為に依存する立場からも台中住民と同じような嫌悪感を持っている。2009年10月頃に第一広場でインタビューしたとき、第一広場の街作りに関する提案の話題の中に、管理委員会のあるメンバーは「あなたたちの学校の夜間部をここに移せば助かる。ここを文教区に変身させ、移住労働者を全部駆逐してほしい。あなたたちがここに移ってくれば、移住労働者はここを出る。」と発言した。つまり、第一広場の衰退を救うために、移住労働者を対象にする商売を行うのはやむをえない選択であるが、他の選択肢があれば、移住労働者以外の案を採用する。移住労働者はもう排除できない現実では、移住労働者を真の消費者として応対しなげれば、第一広場の未来性が見出せないと思うが、王志弘が言う「境界を越えた接触によって理解や同感が生じる可能性」も第一広場で見える。第一広場管理委員会で十年間以上経理の職を務める劉氏が移住労働者との接触の中で生じた理解を、下記に示す。

「東南アジア料理はおいしいよ。一度食べに来たら分かるよ。試すチャンスを自分に与えな



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

ければ、食べに来る意欲は湧かない。私は最初ここで仕事を始めた頃、移住労働者を見て怖い感覚があった。彼らが人を見る眼差しは怖かった。でも、その後、私はたまに土日に来て、彼らが料理店の中で食事したり、歌を歌ったり、ダンスをしたりする様子を見て、想像した怖さを感じなくなった。彼らは実に単純で、快く存在しているだけだよ。ただ台湾で重労働低賃金で働く出稼ぎ者だ。こんな角度で見れば、彼らが悪い人ではないし、台湾人を嫌がらせすることもしないことが分かる。」

フィスク・ジョン(1998:30)はオーストラリアの若者たちが木曜日の夜にショッピングモールを攻撃的に「侵略する」行為について「巧妙なかけひきや策略は弱者の技であり、それによって弱者は体制のルールを自分たちなりに解釈し、自分たちのために利用することができるのである。かけひきや策略は自分たちが断じて屈伏しないという意思表示なのである」と述べている。第一広場を立派なショッピングモールと表現するのはやや無理かもしれないが、多くの人々のアクセスができる(また、期待される)小型百貨店の形態として捉うことができる。また、国民として認められたオーストラリアの若者たちが買い物しないままショッピングモールを「占領」するのに対して、市民権を持たない移住労働者は消費行為の中心者として第一広場に現われる。オーストラリアのショッピングモールにおける若者たちと第一広場における移住労働者は比較にならない差異はあるにもかかわらず、一定の消費場所で一定の行為をするグループ同士が「消費する・しない」という行為によって自己主張ができるという点では変わらない。積極か消極かを問わずに、移住労働者が第一広場で消費的エスノスケープを形成した事実から境界線を動かすなどエスニックの群衆の力が発見した。これは移住労働者自身でさえ分からない力かもしれないが、台湾住民に彼らの存在を意識させ、エスニックの相互理解を促す絶好のチャンスとしてこれを生かしてもらえたらいいと思っている。

(Pai Chun-yen 東海大學日本語文學系 碩士班)







NATIONAL CENTRAL LIBRARY R.O.C.

付表1　台湾移住労働者·外国籍配偶者人数—国籍別（一部）　　単位:人数;%

| 年度別 | 合計　(注1) | | インドネシア | | フィリピン | | タイ | | ベトナム | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2003年末 | 300,150 | * | 56,437 | * | 81,355 | * | 104,728 | * | 57,603 | * |
| 2004年末 | 314,034 | 4.5%↑ | 27,281 | 51.7%↓ | 91,150 | 10.8%↑ | 105,281 | 0.6%↑ | 90,241 | 36.2%↑ |
| 2005年末 | 327,396 | 4.1%↑ | 49,094 | 44.5%↑ | 95,703 | 4.8%↑ | 98,322 | 6.7%↓ | 84,185 | 6.8%↓ |
| 2006年末 | 338,755 | 3.4%↑ | 85,223 | 42.4%↑ | 90,054 | 6.0%↓ | 92,894 | 5.4%↓ | 70,536 | 16.3%↓ |
| 2007年末 | 357,937 | 5.4%↑ | 115,490 | 26.3%↑ | 86,423 | 4.1%↓ | 86,948 | 6.5%↓ | 69,043 | 2.2%↓ |
| 2008年末(a) | 365,060 | 2.0%↑ | 127,764 | 9.7%↑ | 80,636 | 6.7%↓ | 75,584 | 13.1%↓ | 81,060 | 14.9%↑ |
| 国籍別合計を占める割合 | | | 35.0% | | 22.1% | | 20.7% | | 22.2% | |
| 2008年度外国籍配偶者(b)（注2) | | | 26,071 | | 6,233 | | 8,558 | | 80,431 | |
| 2008年度移住労働者＋外国籍配偶者(a)+(b) | | | 153,835 | | 86,869 | | 84,142 | | 161,491 | |

*前年より増加／減少した百分率

注1:モンゴルやマレーシアを含めた合計(モンゴルやマレーシア籍の人数がとても少ないので、本論の議論に入れていない。)

注2:カンボジアと日本を含めた合計

出所:行政院勞工委員会及び戸政司のデータ((2009年12月5日参照))を元に筆者が整理した。



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

付表2　インドネシア移住労働者人数ー年度別　　単位:人数;%

| | 各国合計 | インドネシア | * |
|---|---|---|---|
| 1991年末 | 2,999 | — | 0% |
| 1992年末 | 15,924 | — | 0% |
| 1993年末 | 97,565 | — | 0% |
| 1994年末 | 151,989 | 6,020 | 0% |
| 1995年末 | 189,051 | 5,430 | 9.9%↓ |
| 1996年末 | 236,555 | 10,206 | 46.8%↑ |
| 1997年末 | 248,396 | 14,648 | 30.4%↑ |
| 1998年末 | 270,620 | 22,058 | 33.6%↑ |
| 1999年末 | 294,967 | 41,224 | 46.5%↑ |
| 2000年末 | 326,515 | 77,830 | 47.1%↑ |
| 2001年末 | 304,605 | 91,132 | 14.6%↑ |
| 2002年末 | 303,684 | 93,212 | 2.3%↑ |
| 2003年末 | 300,150 | 56,437 | 39.5%↓ |
| 2004年末 | 314,034 | 27,281 | 51.7%↓ |
| 2005年末 | 327,396 | 49,094 | 44.5%↑ |
| 2006年末 | 338,755 | 85,223 | 42.4%↑ |
| 2007年末 | 357,937 | 115,490 | 26.3%↑ |
| 2008年末 | 365,060 | 127,764 | 9.7%↑ |

*前年より増加／減少した百分率

出所:行政院勞工委員会のデータ(2009年12月5日参照)を元に筆者が整理した。

**参考文献：**


篠原正巳(1996)「台中・日本統治時代の記録」致良出版社

氏平要ら編 (1934) 「台中市史(二)」『中国方志叢書台湾地区第247』成文出版社有限公司

鍾順利(2006)修士論文「台湾日治時期五大都市之公設消費市場建築」國立成功大学

台中市役所編(1937)「台中市管内概況(六)」『中国方志叢書台湾地区第246号』成文出版社有限公司

台中市政府編 (1997) 「台中文献　第五期」台中市政府発行

台中市政府編(2003)「台中文献　第六期」台中市政府発行

何培齊(2009年4月)「日治時期的台中」国家図書館

龔尤倩(2002)「外勞政策的利益結構與翻轉的行政實驗初探:以台北市的外勞行政、文化實踐為例」、







NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 ROC

『台灣社會研究季刊』第四十八期,頁 235-287 。

フィスク·ジョン(1998)「快楽のショッピング」『抵抗の快楽』世界思想社pp.25-71

余如季(1998年3月)「綠川·同心花園」台中市立文化中心

廖家偉(2003)修士論文「台中商業空間的社会生産」東海大学

台中市政府新聞処(2008)「第一廣場市場用地變更　應先提回饋計畫」台中市政府サイト2008年12月19日付(　http://www.tccg.gov.tw/sys/msg_control?mode=viewnews&ts=494b3bda:345b　2009年12月6日参照)

張金治(2006年8月28日)「台中市傳統市場委外經營之探討」『臺中市政府2006年度自行研究發展報告』台中市政府経済局

「電火球仔」月刊((2004年11月~2005年2月) No.49～N0.52経済部商業司

馬源培「公有傳統市場及用地新生之路」科技人文雑誌No.48(http://www.taichung-life.com.tw/index.php?CID=709&REQUEST_ID=cGFnZT1jb2x1bW5fbW14&pn=5　2009年12月6日参照)

黃任膺(2009)「花1500萬元改造　第一廣場　千份美食今試吃」2009年11月1日付蘋果日報(http://tw.nextmedia.com/applenews/article/art_id/32058739/IssueID/20091101　2009年12月6日参照)

龍明成、宋茂榮(2007年8月30日)「公共設施市場用地開發或廢除準則研擬」『臺中市政府2007自行研究發展報告』台中市政府経済局

王志弘(2004)「移/置認同與空間政治:桃園火車站週邊消費族裔地景研究」,『跨界流離:全球化時代移民/工與社會文化變遷研討會』,『跨界流離:全球化時代移民/工與社會文化變遷研討會』,世新大學社會發展研究所主辦, 6月18~19日。【另收於:夏曉鵑編,2009.01,『騷動流移』(pp. 309-356),台北:台灣社會研究雑誌社。】

**参照インターネットサイト：**

監察院http://www.cy.gov.tw

行政院勞工委員會職業訓練局http://www.evta.gov.tw

台中市政府http://www.tccg.gov.tw



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC

台湾図書館「台湾記憶」http://memory.ncl.edu.tw

台湾歴史文化地図http://thcts.ascc.net





注

1 一説には485坪である(台中市役所1937:97)

2 一説には1929と1931年である(台中市役所1937:97)

3 請願巡査:町村や私人からの願い出によって巡査を派遣する制度。また、派遣された巡査。費用は請願者が負担した。(出典:デジタル大辞泉)

4 第二消費市場は日本人の生活品質を満たすために建築した高級市場で、主な来客は日本人であり、品物の価格は第一消費市場より高かった。第一消費市場は消費者が殆ど台湾人であり、価格も安かった。

5 2009年5月6日に3階管理委員会主任委員連朝旺氏)へインタビューしたところ、「仁愛の家は日本植民地時代に救済院と呼ばれ、台中州(現在の台中県、台中市、彰化県、南投県)の地主や紳士が土地や金銭を寄付したことによって設立された財団法人である。戦後、国民党が救済院を接収して国有となったはずであるが、当時の政治斡旋によって私立になってしまった」という事情が紹介された。

6 監察院改正案http://www.cy.gov.tw/record/3-3-1_PDF/88_049.pdf

7 2009年11月24日に40代の女性にインタビューしたところ、1985年に大学の友人と一緒に第一市場へ有名な小吃(シャオチー)店へ行ったことがあって、小吃店が並んでいる賑わった風景が印象的だと言った。

8 2009年11月14日に40代の男性ににインタビューしたところ、1991、1992年の兵隊に入った時期の土日には、必ず同僚と一緒に第一広場で食事したり買い物したりしたと言った。その理由は台中市で一番賑やかな場所だったからである。

9 1～3階は小売市場として元々の営業主によって使われたが、販売形態は伝統市場の代わりに小型百貨店になった。

10 同6



NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

11 http://www.mobile01.com/waypointdetail.php?id=2564

12 第一広場の付近にある衛爾康レストランで1995年2月15日に火事が発生、緊急避難出口が塞がれたため64人が死亡した事件である。

13 2008年6月16日adult.wefong.com/archiver/?tid-1813399.html -

14 違法建築物と認定され、2000年4月5日に取り壊された。http://www.tccn.gov.tw/Pic/Form/63_pep14a04-1.txt

15 2009年4月25日http://www.babyhome.com.tw/mboard.php?op=d&sID=2379073&bid=6&r=0&page=1

16 この文献「移/置認同與空間政治:桃園火車站週邊消費族裔地景研究」は最初2004年に『跨界流離:全球化時代移民/工與社會文化變遷研討會』で発表されたが、筆者が引用するのは2009年出版の『騒動流移』に載せた同じ文献である(pp. 309-356)。詳しくは参考文献参照。

17 「エスノスケープ」は、人類学者のアパデュライ(Arjun Appadurai)による造語であるが、現時点では直接その著作( Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy, University of Minnesota Press, 1996)を読んでいないので、王志弘の注釈を引用して紹介する。「エスノスケープ」は簡単に言えば、「エスニック・アイデンティティの景観」であり、詳しく言えば、「今日の変転する世界を構成している諸個人のランドスケープのことである。つまり、旅行者、移民、難民、亡命者、移住労働者などの集団的ないし個人的な移動は、国家の(そして国家間の)政治に、これまでにないほどの規模で影響を及ぼしているように思われる。」と定義されている。王志弘は消費地域におけるエスノスケープを消費的エスノスケープと名づける。

18 台湾人の移住労働者に対する差別用語である。

19 2008年中旬にある30代の女性にインタビューしたとき彼女の発言である。



NATIONAL CENTRAL LIBRARY ROC